

平成 30 年度冬季テーマ展

火のある暮らしと道具

あわら市郷土歴史資料館
企画展示ゾーンほか

1.はじめに

現代は、暮らしの中で火を使うことが少なくなりましたが、昔は暮らしの中で火を使う道具がたくさんありました。本展では、当時の暮らしを知る手がかりになる資料の一つ、民具の中から火に関連するものとして、食生活の道具、暖房具、照明具を中心に展示し、昔の火のある暮らしを紹介します。

2.食生活の道具

① ^{かまど} 竈 ～生活の中心を担う昔の調理場～



おさごえ民家園 旧岡本家住宅 竈

竈は鍋や釜を置いて、湯を沸かしたり、煮炊きをする場所で、今でいうガスコンロやIHの役目を果たしていました。「クド」「ヘツイ」ともいいます。

土やレンガなどで周囲を囲み、上に鍋や釜を置き、下が焚口（薪などを入れて燃やすところ）となっていました。一般的に土間に築かれることが多いようですが、床上に置き竈を据えることもありました。家を栄えさせることを「竈を起こす」、家庭をもつことを

「竈をもつ」といわれるように、竈は家族の生活の中心を担う重要な場所であると同時に家の象徴であったことがわかります。また、竈の近くには竈を守る「竈神」^{こうじん}「荒神さま」と言われる神様が神棚にまつられ、お札が置かれていました

竈で使われた道具には蒸籠や羽釜、火消壺などがありました。

蒸籠は赤飯や饅頭、もち米などを蒸す道具です。大釜などで湯を沸かし、その上に四段、五段と重ねて使いました。中に通気性がある竹簾を敷きました。下段から順に蒸しあがるので、下から外していきました。

羽釜は竈の上に置いて、ご飯を炊いたり、大豆を煮たり、お湯を沸かすための道具です。釜には銚がついており、調理中におきる、吹きこぼれが竈の中に入らないように防いだり、熱を逃さない働きもあります。

火消壺は残った炭火を入れて、火を消すための道具で、竈の近くに置かれていました。



蒸籠



羽釜



火消壺

② 囲炉裏 ～多くの役割を担う家族団らんの場所～

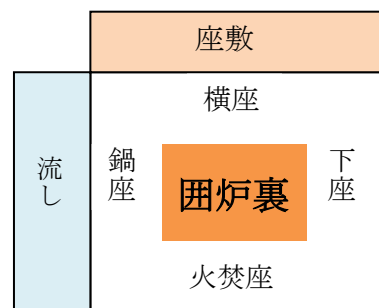
床を四角に切って中に灰を敷き、薪や炭などで火を燃やす場所です。煮炊きや暖とり、夜なべ仕事の照明、家族が食事をする場所など多くの役割を持ちました。

囲炉裏の上から釣り下げられている自在鉤は、茶釜、鉄鍋などの道具を釣るし、道具と火との距離を自在に動かすことで、火力を調節することができました。



おさごえ民家園 旧蓑輪家住宅 囲炉裏

また、囲炉裏を囲んで家族が食事を行いました。家族の座席は決められており、ある家では（図参照）座敷に近い場所は主人が座り、それを横座といいました。流し（ご飯の支度をする場所）に近い場所は主婦が座り、鍋座といいました。主人の父母は横座



図：囲炉裏の座席

の反対側に座り、囲炉裏の火を消えないようにする役目を担っていたため、火焚座ひたきざといいました。子どもたちは下座しもざに座りました。地域や家によって、座席の名前や座る人は異なっていたようです。

囲炉裏で使われた道具には土瓶、茶釜、鉄鍋などがありました。

土瓶はお湯をわかしたり、薬草を煎じたりするのに使う道具です。囲炉裏や火鉢の中に五徳ごとく（鉄製の台）を置いてその上に載せて使いました。通常、弦つるや注ぎ口、蓋ふたを持ちますが、展示資料には注ぎ口が取れて残っていません。鏝がついており、熱を逃さない工夫がされていました。また、蓋裏には「岡山県伊部眞光口」とあり、岡山県産のものと思われます。

茶釜はお湯を沸かす道具で、自在鉤に釣るしたり、囲炉裏の中に五徳を置いてその上に載せて使いました。

鉄鍋は弦（持ち手のこと）がついた鍋で、煮炊きなどに使われました。弦は自在鉤に釣るし、持ち運びをするのに便利でした。



土瓶



茶釜



鉄鍋

2.暖房具 ～冬の寒さをしのぐ必需品～

昔の暖房具には火鉢ひばち、行火あんか、炬燵こたつなどの道具がありました。これらの道具は手足などの体の一部をあたためましたが、火おこしや火力を調節するのに時間と手間がかかりました。

火鉢は中に灰を敷き、炭火を入れて、部屋に置き手などをかざしてあたまる道具です。陶磁器製の丸火鉢や箱形の長火鉢などがあります。長火鉢は灰を入れる落としに多くは銅板を張り、そこに銅壺どうこや五徳を置いて酒を温めたり、お湯を沸かすのにも使用しました。また、引出付きのものがあり、湿気をきらう煙草などを入れました。



丸火鉢（陶器製）



長火鉢



五徳の上に鉄瓶を置く丸火鉢

行火は手足をあたためる道具です。火入れの中に灰を敷き、炭火を入れて使います。寝床や炬燵こたつやぐらの中に入れたり、椅子の下に置いて蒲団ふとんや毛布などをかけて使用しました。形状は、円形で火入れに蓋がついているもの、方形の一面が開いており、そこに火入れ



行火 (左：笏谷石製 右：陶器製)

をいれるもの、かまぼこ型のものなど様々で、側面には、熱を外に広げるために持ち手がかねて穴があけられています。素材は陶器製の他に福井では特産の笏谷石しやくだにいしを加工して作られたものもあります。

炬燵には置炬燵おきごたつと掘炬燵ほりごたつがありました。炬燵こたつやぐらはこれらの櫓として使われた道具です。置炬燵は櫓の中に火入れや行火を入れて、蒲団をかけて持ち運びが自由にできる炬燵です。掘炬燵は、炉を切って、その上に櫓を置き、蒲団をかけます。展示資料の炬燵櫓は、置炬燵の櫓として使われたものか、掘炬燵



炬燵櫓

の櫓として使われたものかは不明です。昔の炬燵にはテーブル板がありませんでした。温泉宿などで炬燵が食卓代わりとして使われ始めると、一般家庭でも置かれるようになりました。

明治になると、だるまストーブが使われ始めました。主に石炭を燃料とする鉄製や鋳物製のストーブで、火力が強く、部屋全体をあたためることができましたが、火おこしが失敗すると、部屋中煙だらけになりました。また、途中で燃料を継ぎ足さないと火が持続しない上に、大量に出る灰の後始末が大変でした。



だるまストーブ

胴体についている扉は焚口で、ここから燃料を入れて燃やしました。後部には煙突穴がついており、排気ガスを外へ送り出しました。焚口についている丸い部分には空気穴がついており、

穴を開くと火が強まり、閉めると火が弱まって空気の量を調節することができました。また、上部には蓋がついており、そこから燃料を入れることもあったようですが、やかんなどを置き、お湯を沸かしました。

1950年代から1960年代にかけて、火おこしをする必要がなく、温度調節が容易な電気行火、電気炬燵、石油ストーブなどが登場し、人々は時間と手間をかけずに手足や部屋をあたためることができるようになりました。



電気行火



湯たんぽ

これらの暖房具の他にも湯たんぽといって足をあたためる道具がありました。栓からお湯を入れて、火傷をしないように袋や布でくるみ寝床に入れて、使いました。亀の甲羅や半円筒の形をしており、金属製や陶器製のものがあります。表面の凸凹は、熱を外へ伝えやすくするための工夫です。お湯を入れるだけであたたまることができるため、気軽に使うことができました。朝には冷めてぬるま湯になりそれを洗顔に使ったそうです。現在でも使われ続けています。

3. 照明具 ～うす暗い部屋から明るい部屋へ～



火袋
油皿置き
台座

行灯

昔の明かりとして使われた道具には行灯や石油ランプなどがありました。行灯は燃料の菜種油が高い上に、手を照らすのがやっとでした。もともと夜間外出の際、足元を照らす道具でしたが、江戸時代に提灯ができたため、室内に置いて使われるようになりました。行灯の周りには、風で火が揺れたり、消えたりしないように、火袋（紙の覆い）がされ、その一方を扉や指蓋（スライド式の蓋）にすることで、油の注ぎ口となりました。中央には油皿置きがありました。下部には台座があり、この上に油差を置きました。また、灯芯や火打ちなどを入れる引出しがついていました。



火屋
調節ネジ
油壺

石油ランプ

石油ランプは行灯より明るいものの、部屋全体を照らすことはできませんでした。江戸時代末期に伝来し、明治時代に普及しました。油壺に灯油を入れ、木綿糸で編まれた芯がそれを吸い込み、その先端に火が灯されました。芯の長さを調節できるネジがついており、芯を長くすると明るくなり、短くすると暗くなります。透明のガラス製でできた火屋は火の周りを囲い、風で火が消えないようにするためのものです。燃やすと煤ができるため、火屋の内部は黒くなりました。火屋の入口は狭く、それを掃除するのは子供たちの役目でした。

大正から昭和にかけて明るく火事の心配がない電灯が登場しますが、最初のころの電灯は電気代が高く夜は早く寝ました。

人々がようやく安価で明るい照明を手に入れたのは 1950 年代に入ってからでした。

【参考書】

- ・岩井宏實 監修『絵引 民具の事典』（河出書房新社 2008）
- ・同 監修『日本の生活道具百科1 食べる道具』（河出書房新社 1998）
- ・同 監修『日本の生活道具百科2 住まう道具』（河出書房新社 1998）
- ・神野善治 監修『日本のくらしの知恵事典』（岩崎書店 2008）
- ・工藤員功 監修『昔の道具』（ポプラ社 2011）
- ・田中力 監修『昔のくらし』（ポプラ社 2005）
- ・日本民具学会 編集『日本民具辞典』（ぎょうせい 1997）
- ・『昭和30年代と暮らし』（氷見市立博物館 2007）

あわら市郷土歴史資料館

平成30年度冬季テーマ展「火のある暮らしと道具」

会 期：1月16日（水）～5月19日（日）

開館時間：9:30～18:00（最終入館は17:30）

休 館 日：毎週月曜日・毎月第4木曜日（これらの日が祝日の場合はその翌日）

お問合せ：電話 0776-73-5158 e-mail:maibun@city.awara.lg.jp

